

食料消費行動における地域格差に関する考察

坂本 美須子

An Analysis of the Differences as Seen among City Groups in Food Consumption Behavior

Misuko SAKAMOTO

1. はじめに

私たちの食生活が、「どのような問題を含んでいるにせよ、すでに成熟段階に達している。」と
言うのは、大方の識者の意見である⁽¹⁾⁽²⁾。生活をつぶさに見ていくなれば、この「どのような問題
…」というこれらの問題こそが問題であるのだが、ここではその一つ一つについて考察すること
は出来ないので、食生活の成熟化及び標準化という面に着目し、これらの動向が、全国一律に見
られるものかどうかということ考察していきたい。それは近年とみに様々な分野で「格差」と
いうことばが使われ、また実生活においても、「格差」ならぬ「段差」あるいは「隔差」といわれ
るものさえ実感されるというように考えるからである。本当に日本人の食生活は成熟化したとい
えるのであろうか。またそれらの成熟化はあらゆる都市、階級、年代等において現れ、すなわち
食生活の標準化が進んでいるといえるのであろうか。

たとえば、年代別における食生活の相違という点では、次のような考察を得た⁽³⁾。すなわち現代
の豊かな食生活を実現しているのは、世帯主年齢が中高年の階層であって、世帯主年齢が若年の
階層においてはそのような結果は得られない。そこでは、「食料品の各項目における1人当たり支
出金額」と「購入食料品の単価」の二つを指標としてみた。その結果、世帯主年齢が若年の階層
においては、「食料品の各項目における1人当たり支出金額」において平均値を上回るものがな
い。一方の中高年齢層においては、ほとんどすべての食料において平均値を上回っており、かつ
基幹的食料などについても単価の高いものを購入しているという考察が得られた。近い将来のわ
が国を背負う、あるいは来るべき将来、重要な社会の労働力あるいは人材となる子供たちの食生
活を実現しているべきこのような世帯主年齢が若年の階層で食料に対する関心の低さ、食生活に
対する取り組みの軽さというものが見られることが危惧される。

思い起こせば、私たち日本人の食生活は敗戦後、本当に急激に変化したといえる⁽⁴⁾。食べるもの
に困っていた時代、外食にあこがれていた時代、学校給食のありがたさ、そのような時期を経て、
私たちはいつの間にか手に入らない食べ物はないという時代に入った。そして本当にいつの間
にか食べ物について深く考えることも、多分なくなった。これは、先にいう成熟化ということと同
時進行してきたことなのだろうか。

ここではまず、食生活の成熟化ということばが何を意味するのかということについてこれまでの論文あるいは文献を中心に考察し、次に統計データより、このような食生活の成熟化がどの程度の規模で全国的に広がっているのかあるいは一部の地域に限られているのかということ、すなわち成熟化の中身を考察していきたい。統計データについては、総務庁「家計調査年報」の県庁所在都市別データによった。都道府県間の格差の概要を把握することが出来ると考えたからである。47都道府県の県庁所在都市以外に神奈川と福岡から大都市がそれぞれ一つずつ選ばれているのでデータ総数は49となる。

2. 食料消費行動の成熟化と標準化について

食生活の成熟化については次の二つの基準が設けられている⁽⁵⁾。すなわち一つには購入数量の安定化であり、いま一つは、所得の食生活に与える影響力の弱化である。購入数量の安定化という面は、すなわち消費数量が不変であるということによって示される。ここでこの消費数量については当然のことながら、「1人当たり」の数量がとられなければならない。しかし「1人当たり」といっても、数10年前の日本の「1人当たり」と現在のそれとではやや内容あるいは質といわれるものが異なると考えられる。すなわち周知のように近年日本は急速に高齢化が進んでおり、平均年齢もそれに伴って上昇しているからである。高年齢になると食料消費は物理的に減少してくと考えられるし、その内容すなわち嗜好も異なってくると考えられるからである。このようなことを含みつつここでは興味あるデータを引用したい。表1. に消費数量の増減が示されている。

表1. は品目別の消費数量について、1963年以降の変化の様子を「増加」、「不変」、「減少」の三つに分け、それぞれの品目をこの中のいずれかに分類し、集計としての品目シェアを見たものである。全体的な流れを見れば、「不変」のものがシェアを伸ばし、「増加」しているもののシェアが下降していると読み取ることも出来る。「減少」しているものは期間の前半は大きくそのシェアを伸ばしたが、後半は若干の下降が見られる。この下降を埋めているのが「増加」のシェアのわずかな上昇である。三つの調査期間において一つの分岐点のようなものが存在するのではないかと考えられる。すなわち、1963-74年は文字通り、経済成長の渦中にあり、食生活においても所得の上昇とともにこれまで不足していた分まで購入消費するという消費数量そのものの増加が

あったと考えられる。この期間消費数量を増加させた食料品目が全体のほぼ半数を占めている。しかし次の期間、すなわち1975-86年になると全く逆の様相を帯びてくる。消費数量を減少させた食料品目が全体の44%にの

表1. 消費数量の増減（品目シェア）

(単位；%)

	増加	不変	減少	変動幅の 平均値
1963-74年	49.5	18.9	31.7	5.4
1975-86年	27.2	28.8	44.0	3.3
1987-97年	30.0	28.5	41.6	3.0

注；時子山ひろみ『フードシステムの経済分析』（日本評論社、1999年）より、加工して引用した。

食料消費行動における地域格差に関する考察（坂本美須子）

ばるのである。変動幅も大きく減少している。これらのことから、この二つ目の期間に食料に対する要求が急激に少なくなっていったと考えられる。このことは別の言い方をすれば、食料の需要は満たされた、これ以上の要求は必要ないという状況に入ったということを示している。そして次の期間である。ここでは、一転して消費数量を増加させた食料品目の割合がわずかではあるが増加しているのである。このことはどのような食料消費の内容を意味しているのだろうか。時子山論文はこの時点で「不変」のシェアが変わっていないということを示している。食生活の成熟化の一つの要件を満たしていると考えられている。これ以降の近年における集計が必要であろうと思われる。

次に表2. であるが、これは表1. と同じ期間設定のもとで、消費数量の所得弾力性を見たものである。ここでは表1. よりももっとはっきりとした形で食生活の成熟化が明らかにされる。すなわち三つの期間のすべてにわたって一貫した傾向が読み取れる。所得弾力性が「プラス」の食料品目のシェアは一貫して減少し、しかもかなりのスピードで減少しているといえるのである。逆にこのシェアが大きく上昇しているのが、所得弾力性が「ゼロ」、すなわち所得が食料消費に関与しないという食料品目である。1963-74年の期間においては、約60%の食料品目の所得弾力性が「プラス」であった。これはすなわち、所得が増加すればその食料品目に対する消費数量も増加するというを示しており、所得が食料消費に何らかの影響、ここでは「プラス」の影響を与えたということを示している。1987-97年になると、実に4分の3の食料品目で所得弾力性が「ゼロ」になっている。食料消費の如何、購入数量の如何に所得は関係ないということになる。ここで所得という要因の中には、たとえば年齢であるとか、職業、学歴、性別のようなものも複雑に関係してくると考えられるから、これらの要因についても、食料消費への決定力は弱まっているといえるだろう。ところでこのことは先に示した年齢による食料消費の相違と整合しないものである。このような年齢による食生活の相違はごく近年にみられはじめたものなのだろうか。あるいは年齢という要因自体が所得との関連が弱くなってきているということも考えられる。

以上の二つの基準をみて日本人の食生活は成熟化の段階に入ったと結論づけている。もう一つの標準化であるが、これについては、地域別のデータを見ながら考察していきたい。なおここでは食料品目の大分類に当たる12種の食品項目について考察した。地域によって食料消費に明らかな差があるかどうか、あるとすればそれはどのような傾向をとっているかということ考察したい。

表2. 消費数量の所得弾力性（品目シェア）

(単位；%)

	マイナス	ゼロ	プラス	合計
1963-74年	5.7	35.5	58.9	100.0
1975-86年	3.3	51.4	45.3	100.0
1987-97年	2.4	73.6	24.2	100.1

注；時子山ひろみ『フードシステムの経済分析』（日本評論社、1999年）より、加工して引用した。

3. 地域（都市）別分析

地域間格差を検証できるデータとして用いたのが、「家計調査年報」の県庁所在都市別データである。食料消費行動を考察していくことが目的であるから、ここでは、世帯当たり実収入と世帯当たり消費支出、及び世帯当たり食料費をとった。また食料費支出構成をみていくために、食料費の大分類12品目のすべてについて、地域間格差をみていくことにした。データ数は先に述べたような理由から49である。

表3. は都道府県庁所在都市別のデータである。世帯当たりの実収入、消費支出、食料費を示し、世帯人員数で除した1人当たりの値をそれぞれ示した。また内野論文⁶⁾は、次の指標として東京の値を100とした指数を示しているが、ここでは平均値を100としたときの指標を用いた。昭和30年代以降、地方にとって、東京の暮らしに追いつくというのが目標であった時代にはこのような指標が必要であったかもしれないが、すでに追いつくものではなく、その格差を知らしめられるものになっているからである。よって東京を100とする理由はないと考えるので、平均値を100として平均との格差をすべての都市についてみていくという方法をとった。

表3. は一見して東高西低を示している。すなわち九州にはこれらの三つの指標ともに平均を上回る都市はひとつもない。特に沖縄県の低さは特記すべきものである。このような指標水準と度数及び割合との関連を示したものが表4である。各都市がばらばらにカウントされるので先のような地域による特徴等はつかみ得ないが、概略を把握できる。表4. からは、三つの指標において、指標水準80～120の範囲内にほとんどすべての都市が入っていることがわかる。特に貧乏な都市もなく、特に裕福な都市もない、いわゆる平均の周りにほとんどのデータが存在するという状況である。また100を超えるのはほぼ50%であるから、九州の9都市はほとんどすべて平均以下なのである。特に沖縄県は3指標のすべてが全都市の中で最も低いものとなっている。

表5. は食料消費をみるために先にあげた49都市について食料の12品目の支出金額を見たものである。世帯当たりと1人当たりを示している。また49都市の比較が容易になるようにここでも平均を100とした指標を示した。表6. はこれらの12品目について、それぞれの指標における度数と割合を示したものである。表7. はさらに12品目について平均値、標準偏差及び変化係数を示した。各品目の特徴が読み取れると考える。

表5. から以下のようなことが考察される。1人当たり支出額が最も大きいのは、「外食」であり、次いで「調理食品」、「野菜・海草」・「穀類」となっている。「外食」はその性格上サービスも含むと考えられるから支出金額が膨らむのは当然である。次いで多い「調理食品」も現在の食生活を考えれば納得のいくものである。すなわちわれわれの食生活は、素材としての食品を購入することが極端に少なくなり、「食事を買う。」という状況に次第に近づいているのである。「野菜・海草」と「穀類」については、いずれも伝統的な日本人の食生活を実現するのに欠かせない食材であり、支出額の大きさからいっても食料の中でも依然として重要な位置をもつものであるといえるだろう。このような伝統的な食生活を実現するための食料と急激に外食化等の食の外部化が

食料消費行動における地域格差に関する考察 (坂本美須子)

表3. 都道府県庁所在市別1世帯当たり年平均1か月間の収入と支出(勤労者世帯)

都道府県	県庁所在都市	世帯人員	実収入	一人当たり実収入	平均=100としたときの指数	消費支出	一人当たり消費支出	平均=100としたときの指数	食料費	一人当たり食料費	平均=100としたときの指数
北海道	札幌市	3.36	502,727	149,621	98	317,515	94,499	99	66,798	19,880	96
青森	青森市	3.30	499,448	151,348	99	309,362	93,746	98	67,738	20,527	99
岩手	盛岡市	3.38	491,120	145,302	95	334,270	98,896	103	72,477	21,443	103
宮城	仙台市	3.22	428,540	133,087	87	305,220	94,789	99	72,193	22,420	108
秋田	秋田市	3.34	585,269	175,230	114	352,355	105,496	110	73,906	22,128	106
山形	山形市	3.56	530,200	148,933	97	328,888	92,384	97	71,705	20,142	97
福島	福島市	3.55	546,523	153,950	100	328,813	92,623	97	66,252	18,663	90
茨城	水戸市	3.43	542,549	158,178	103	320,978	93,580	98	67,218	19,597	94
栃木	宇都宮市	3.40	601,525	176,919	115	366,335	107,746	113	76,663	22,548	109
群馬	前橋市	3.44	433,430	125,997	82	282,992	82,265	86	65,483	19,036	92
埼玉	さいたま市	3.41	558,646	163,826	107	341,700	100,205	105	74,742	21,918	105
千葉	千葉市	3.23	523,397	162,042	106	346,619	107,312	112	72,742	22,521	108
東京	東京都区部	3.28	561,694	171,248	112	362,744	110,593	116	80,537	24,554	118
神奈川	横浜市	3.39	604,190	178,227	116	381,235	112,459	117	81,681	24,095	116
神奈川	川崎市	3.21	647,088	201,585	131	378,089	117,785	123	83,551	26,028	125
新潟	新潟市	3.48	575,592	165,400	108	350,155	100,619	105	72,957	20,965	101
富山	富山市	3.58	664,643	185,654	121	395,804	110,560	116	76,565	21,387	103
石川	金沢市	3.60	578,072	160,576	105	336,704	93,529	98	72,966	20,268	98
福井	福井市	3.36	527,778	157,077	102	287,923	85,691	90	67,574	20,111	97
山梨	甲府市	3.44	461,018	134,017	87	300,849	87,456	91	69,225	20,124	97
長野	長野市	3.68	555,235	150,879	98	330,348	89,768	94	70,692	19,210	92
岐阜	岐阜市	3.68	570,788	155,105	101	351,404	95,490	100	73,533	19,982	96
静岡	静岡市	3.30	529,701	160,515	105	331,063	100,322	105	71,914	21,792	105
愛知	名古屋市	3.42	535,586	156,604	102	330,010	96,494	101	74,922	21,907	105
三重	津市	3.35	527,042	157,326	103	336,778	100,531	105	76,706	22,897	110
滋賀	大津市	3.61	533,048	147,659	96	331,645	91,868	96	80,603	22,328	107
京都	京都市	3.54	468,589	132,370	86	307,074	86,744	91	76,695	21,665	104
大阪	大阪市	3.36	406,338	120,934	79	281,256	83,707	87	69,404	20,656	99
兵庫	神戸市	3.42	416,325	121,732	79	283,042	82,761	86	71,176	20,812	100
奈良	奈良市	3.60	585,268	162,574	106	344,515	95,699	100	76,372	21,214	102
和歌山	和歌山市	3.22	495,275	153,812	100	278,718	86,558	90	67,482	20,957	101
鳥取	鳥取市	3.44	434,942	126,437	82	284,216	82,621	86	65,071	18,916	91
島根	松江市	3.28	598,921	182,598	119	330,244	100,684	105	70,642	21,537	104
岡山	岡山市	3.48	507,806	145,921	95	310,725	89,289	93	65,002	18,679	90
広島	広島市	3.39	575,482	169,759	111	362,425	106,910	112	71,703	21,151	102
山口	山口市	3.47	570,022	164,271	107	367,629	105,945	111	70,491	20,314	98
徳島	徳島市	3.49	587,285	168,277	110	349,466	100,134	105	67,833	19,436	94
香川	高松市	3.23	563,921	174,589	114	343,559	106,365	111	66,005	20,435	98
愛媛	松山市	3.28	472,809	144,149	94	290,701	88,628	93	64,382	19,629	94
高知	高知市	3.18	561,188	176,474	115	350,087	110,090	115	71,739	22,559	109
福岡	北九州市	3.15	459,622	145,912	95	301,443	95,696	100	71,437	22,678	109
福岡	福岡市	3.59	481,977	134,255	88	353,464	98,458	103	74,456	20,740	100
佐賀	佐賀市	3.54	467,787	132,143	86	311,296	87,937	92	68,471	19,342	93
長崎	長崎市	3.34	413,726	123,870	81	296,855	88,879	93	68,358	20,466	98
熊本	熊本市	3.72	453,864	122,006	80	322,233	86,622	90	66,100	17,769	86
大分	大分市	3.35	600,707	179,316	117	327,422	97,738	102	63,914	19,079	92
宮崎	宮崎市	3.28	521,467	158,984	104	304,050	92,698	97	65,308	19,911	96
鹿児島	鹿児島市	3.61	519,909	144,019	94	337,069	93,371	98	67,447	18,683	90
沖縄	那覇市	3.69	374,281	101,431	66	243,298	65,934	69	56,052	15,190	73

資料：総務庁『家計調査年報』平成16年

表4. 指数水準と度数及び割合

指標水準	1人当たり実収入		1人当たり消費支出		1人当たり食料費	
	度数	割合(%)	度数	割合(%)	度数	割合(%)
120以上	2	4.1	1	2.0	1	2.0
100～120	25	51.0	23	46.9	23	46.9
80～100	19	38.8	24	49.0	24	49.0
60～80	3	6.1	1	2.0	1	2.0
40～60	0	0.0	0	0.0	0	0.0
20～40	0	0.0	0	0.0	0	0.0
20未満	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計	49	100.0	49	100.0	49	100.0

資料；表3. と同じ。

進んだ状況を示す食料とが並存していることはきわめて特徴的なことである。逆に1人当たり支出額が小さいのは「油脂・調味料」と「酒類」である。これは明らかにこれらの食料としての特徴からきているものと考えられる。すなわち、「油脂・調味料」は一人ひとりに必要であるものは少なく、ひとつの料理に必要なものが大半であると考えられるから、当然1人当たりの支出額は小さくなっていくだろう。加えて、日本人の食生活を考えるとき必ず出てくる問題に食塩の摂りすぎという問題があるが、このような問題を考えて過剰な調味料を摂取しないようにするという食行動がこの背景にあるともいえる。「酒類」については、その摂取量に年齢による差というものを考慮に入れなければならない。このデータから見ると、データのバラツキも大きいようである。重要な蛋白源である「魚介類」及び「肉類」は、いずれも1800円を超える数値であり、「穀類」等に次ぐ重要な食料となっていることがわかる。

次に表6. であるが、これは表5. の中の、1人当たり支出額について、平均を100としたときの各都市の指数をいくつかの階級にわけ、その階級に所属する都市を度数と割合で表したものである。ここでは次のようなことが考察される。「穀類」「油脂・調味料」「菓子類」においては、指標水準120以上の都市はひとつもなく、ほとんどすべての都市が平均値のまわりに存在している。このことはこれらの食料の必需性の高さを示しているともいえる。「果物」「酒類」においては、比較的分布が広がっている。「外食」「調理食品」は同じような分布を示しているが、「果物」等に比べて平均値のまわりにより多くのデータが集まってきている。このような状況をもう少し正確に判断するため、標準偏差等を計算して示したものが表7. である。

表7. では、平均値、標準偏差及び変化係数を示した。「穀類」「油脂・調味料」において変化係数が小さく、「果物」「酒類」「外食」において、変化係数が大きい。都市間の格差が大きいということである。また、先にあげた重要な蛋白源である「魚介類」「肉類」についても変化係数が高く、都市によって明らかな格差があることがわかる。

食料消費行動における地域格差に関する考察 (坂本美須子)

表 5. 都道府県庁所在市別 1 世帯当たり年平均 1 か月間の食料費各項目への支出 (勤労者世帯)

都道府県	県庁所在都市	世帯人員	穀類	1人当たり穀類	平均=100としたときの指数	魚介類
北海道	札幌市	3.36	7,099	2,113	104	5,976
青森	青森市	3.30	6,191	1,876	92	7,391
岩手	盛岡市	3.38	7,235	2,141	105	7,154
宮城	仙台市	3.22	6,419	1,993	98	7,145
秋田	秋田市	3.34	6,559	1,964	97	7,457
山形	山形市	3.56	7,133	2,004	99	6,749
福島	福島市	3.55	6,346	1,788	88	6,217
茨城	水戸市	3.43	6,339	1,848	91	6,108
栃木	宇都宮市	3.40	7,079	2,082	102	6,061
群馬	前橋市	3.44	6,885	2,001	98	5,501
埼玉	さいたま市	3.41	7,090	2,079	102	6,012
千葉	千葉市	3.23	6,742	2,087	103	6,397
東京	東京都区部	3.28	7,246	2,209	109	6,919
神奈川	横浜市	3.39	7,891	2,328	114	7,063
神奈川	川崎市	3.21	7,220	2,249	111	6,435
新潟	新潟市	3.48	6,024	1,731	85	5,699
富山	富山市	3.58	7,403	2,068	102	7,881
石川	金沢市	3.60	6,820	1,894	93	6,005
福井	福井市	3.36	6,725	2,001	98	6,523
山梨	甲府市	3.44	6,780	1,971	97	6,154
長野	長野市	3.68	7,299	1,983	98	7,012
岐阜	岐阜市	3.68	7,021	1,908	94	5,825
静岡	静岡市	3.30	7,616	2,308	114	6,510
愛知	名古屋市	3.42	7,898	2,309	114	6,572
三重	津市	3.35	7,245	2,163	106	8,468
滋賀	大津市	3.61	7,834	2,170	107	7,135
京都	京都市	3.54	7,994	2,258	111	6,278
大阪	大阪市	3.36	7,584	2,257	111	6,246
兵庫	神戸市	3.42	7,866	2,300	113	6,740
奈良	奈良市	3.60	7,732	2,148	106	6,687
和歌山	和歌山市	3.22	7,215	2,241	110	7,761
鳥取	鳥取市	3.44	6,966	2,025	100	6,548
島根	松江市	3.28	6,625	2,020	99	5,794
岡山	岡山市	3.48	6,492	1,866	92	5,092
広島	広島市	3.39	6,979	2,059	101	5,830
山口	山口市	3.47	6,745	1,944	96	6,425
徳島	徳島市	3.49	6,050	1,734	85	5,728
香川	高松市	3.23	6,390	1,978	97	6,004
愛媛	松山市	3.28	6,345	1,934	95	5,859
高知	高知市	3.18	6,594	2,074	102	6,994
福岡	北九州市	3.15	7,518	2,387	117	7,555
福岡	福岡市	3.59	7,061	1,967	97	6,102
佐賀	佐賀市	3.54	7,022	1,984	98	6,141
長崎	長崎市	3.34	7,512	2,249	111	7,592
熊本	熊本市	3.72	6,413	1,724	85	5,053
大分	大分市	3.35	6,243	1,864	92	5,135
宮崎	宮崎市	3.28	6,280	1,915	94	4,967
鹿児島	鹿児島市	3.61	6,535	1,810	89	5,298
沖縄	那覇市	3.69	5,960	1,615	79	3,569

資料；表 3. と同じ。

1人当たり魚介類	平均=100としたときの指数	肉類	1人当たり肉類	平均=100としたときの指数	乳卵類	1人当たり乳卵類	平均=100としたときの指数
1,779	95	5,464	1,626	87	2,896	862	85
2,240	120	5,529	1,675	90	2,777	842	83
2,117	113	5,749	1,701	91	3,655	1,081	106
2,219	119	5,784	1,796	96	3,883	1,206	118
2,233	120	5,340	1,599	85	3,407	1,020	100
1,896	102	6,004	1,687	90	3,590	1,008	99
1,751	94	5,114	1,441	77	3,376	951	93
1,781	95	5,099	1,487	79	3,370	983	97
1,783	95	4,860	1,429	76	3,801	1,118	110
1,599	86	4,516	1,313	70	3,175	923	91
1,763	94	5,896	1,729	92	3,694	1,083	106
1,980	106	5,671	1,756	94	3,665	1,135	111
2,109	113	6,230	1,899	102	3,769	1,149	113
2,083	112	7,274	2,146	115	3,930	1,159	114
2,005	107	6,261	1,950	104	3,979	1,240	122
1,638	88	5,323	1,530	82	3,641	1,046	103
2,201	118	6,091	1,701	91	3,196	893	88
1,668	89	5,588	1,552	83	3,749	1,041	102
1,941	104	6,680	1,988	106	3,281	976	96
1,789	96	5,583	1,623	87	3,392	986	97
1,905	102	8,232	2,237	120	3,830	1,041	102
1,583	85	6,565	1,784	95	3,713	1,009	99
1,973	106	5,491	1,664	89	3,204	971	95
1,922	103	6,505	1,902	102	3,945	1,154	113
2,528	135	7,473	2,231	119	3,695	1,103	108
1,976	106	8,257	2,287	122	4,013	1,112	109
1,773	95	7,457	2,106	113	3,421	966	95
1,859	100	6,675	1,987	106	3,422	1,018	100
1,971	106	7,524	2,200	118	3,786	1,107	109
1,858	100	8,021	2,228	119	3,694	1,026	101
2,410	129	7,794	2,420	129	3,109	966	95
1,903	102	6,445	1,874	100	3,175	923	91
1,766	95	6,174	1,882	101	3,741	1,141	112
1,463	78	6,106	1,755	94	3,326	956	94
1,720	92	7,407	2,185	117	3,683	1,086	107
1,852	99	7,409	2,135	114	3,850	1,110	109
1,641	88	6,407	1,836	98	3,386	970	95
1,859	100	6,329	1,959	105	3,129	969	95
1,786	96	6,552	1,998	107	3,412	1,040	102
2,199	118	6,275	1,973	105	3,317	1,043	102
2,398	128	7,181	2,280	122	3,047	967	95
1,700	91	7,352	2,048	109	3,924	1,093	107
1,735	93	6,983	1,973	105	3,323	939	92
2,273	122	7,065	2,115	113	3,042	911	89
1,358	73	6,828	1,835	98	3,609	970	95
1,533	82	6,957	2,077	111	3,066	915	90
1,514	81	6,121	1,866	100	3,068	935	92
1,468	79	6,942	1,923	103	3,365	932	92
967	52	4,808	1,303	70	2,970	805	79

食料消費行動における地域格差に関する考察 (坂本美須子)

野菜・海草	1人当たり 野菜・海草	平均=100とし たときの指数	果物	1人当たり 果物	平均=100とし たときの指数	油脂・ 調味料	1人当たり 油脂・調味料
7,624	2,269	96	2,623	781	113	2,735	814
8,683	2,631	111	2,299	697	101	2,900	879
9,044	2,676	113	2,735	809	117	3,255	963
9,388	2,916	123	3,025	939	136	3,109	966
9,459	2,832	120	3,084	923	134	3,196	957
8,941	2,512	106	2,025	569	83	3,086	867
8,622	2,429	103	1,973	556	81	2,976	838
7,610	2,219	94	2,411	703	102	2,771	808
8,421	2,477	105	2,971	874	127	2,940	865
7,646	2,223	94	2,485	722	105	2,921	849
9,173	2,690	114	2,703	793	115	3,009	882
8,757	2,711	115	2,758	854	124	3,017	934
9,215	2,809	119	2,744	837	121	2,980	909
9,842	2,903	123	2,893	853	124	3,534	1,042
9,605	2,992	126	2,439	760	110	3,254	1,014
8,242	2,368	100	2,475	711	103	2,992	860
8,977	2,508	106	2,592	724	105	2,965	828
7,152	1,987	84	2,248	624	91	3,081	856
8,220	2,446	103	2,164	644	93	2,861	851
8,058	2,342	99	2,366	688	100	2,955	859
7,919	2,152	91	2,001	544	79	3,453	938
7,665	2,083	88	2,475	673	98	2,998	815
8,635	2,617	111	2,134	647	94	2,932	888
8,970	2,623	111	3,157	923	134	3,134	916
8,496	2,536	107	2,866	856	124	3,377	1,008
8,989	2,490	105	2,442	676	98	3,583	993
8,659	2,446	103	2,133	603	87	3,176	897
8,199	2,440	103	2,201	655	95	2,843	846
8,333	2,437	103	2,671	781	113	3,015	882
8,844	2,457	104	2,692	748	109	3,236	899
7,258	2,254	95	1,792	557	81	2,894	899
8,087	2,351	99	2,243	652	95	3,262	948
8,526	2,599	110	2,667	813	118	3,389	1,033
6,728	1,933	82	1,892	544	79	3,047	876
7,790	2,298	97	2,303	679	99	3,110	917
7,247	2,088	88	2,138	616	89	3,231	931
6,549	1,877	79	1,935	554	80	2,654	760
6,944	2,150	91	1,893	586	85	2,888	894
6,818	2,079	88	2,046	624	91	2,975	907
7,742	2,435	103	2,464	775	112	3,193	1,004
8,014	2,544	108	2,471	784	114	3,075	976
8,715	2,428	103	2,427	676	98	3,357	935
7,386	2,086	88	1,853	523	76	3,077	869
7,152	2,141	91	2,132	638	93	3,089	925
6,776	1,822	77	1,691	455	66	3,003	807
6,779	2,024	86	1,730	516	75	2,833	846
6,621	2,019	85	1,976	602	87	2,957	902
7,055	1,954	83	2,072	574	83	3,246	899
6,045	1,638	69	1,561	423	61	2,576	698

平均=100としたときの指数	菓子類	1人当たり菓子類	平均=100としたときの指数	調理食品	1人当たり調理食品	平均=100としたときの指数	飲料
91	5,050	1,503	98	6,415	1,909	79	4,357
98	4,926	1,493	97	7,631	2,312	95	4,029
107	5,963	1,764	115	7,587	2,245	93	4,199
108	5,590	1,736	113	7,821	2,429	100	4,115
107	5,294	1,585	103	7,337	2,197	91	3,970
97	5,442	1,529	100	8,808	2,474	102	3,761
93	5,345	1,506	98	8,367	2,357	97	3,859
90	5,154	1,503	98	7,474	2,179	90	4,038
96	6,176	1,816	118	9,527	2,802	116	5,029
95	5,140	1,494	97	8,482	2,466	102	4,073
98	5,189	1,522	99	8,160	2,393	99	4,296
104	5,317	1,646	107	8,064	2,497	103	4,236
101	5,257	1,603	104	8,655	2,639	109	4,185
116	5,763	1,700	111	9,590	2,829	117	4,760
113	5,860	1,826	119	9,444	2,942	121	4,672
96	5,850	1,681	109	9,332	2,682	111	3,934
92	5,382	1,503	98	8,559	2,391	99	4,333
95	5,766	1,602	104	9,205	2,557	105	3,607
95	4,849	1,443	94	9,350	2,783	115	3,433
96	4,916	1,429	93	8,875	2,580	106	3,752
105	5,368	1,459	95	8,008	2,176	90	3,848
91	5,523	1,501	98	8,269	2,247	93	3,827
99	4,960	1,503	98	9,880	2,994	124	3,695
102	5,418	1,584	103	8,475	2,478	102	3,455
112	6,005	1,793	117	9,977	2,978	123	3,822
111	6,198	1,717	112	9,747	2,700	111	3,855
100	5,421	1,531	100	9,286	2,623	108	3,440
94	4,645	1,382	90	8,265	2,460	101	3,403
98	5,116	1,496	97	7,693	2,249	93	3,250
100	5,531	1,536	100	8,276	2,299	95	3,431
100	4,516	1,402	91	7,251	2,252	93	3,480
106	4,797	1,394	91	8,100	2,355	97	3,152
115	5,546	1,691	110	8,429	2,570	106	3,471
98	5,851	1,681	109	7,583	2,179	90	3,591
102	5,079	1,498	98	8,060	2,378	98	3,597
104	5,192	1,496	97	8,132	2,344	97	3,593
85	5,211	1,493	97	7,697	2,205	91	3,526
100	5,003	1,549	101	6,749	2,089	86	3,427
101	4,504	1,373	89	7,478	2,280	94	3,677
112	4,633	1,457	95	9,018	2,836	117	3,607
109	4,501	1,429	93	8,122	2,578	106	3,364
104	5,727	1,595	104	7,931	2,209	91	3,922
97	4,715	1,332	87	8,527	2,409	99	3,667
103	4,835	1,448	94	7,833	2,345	97	3,435
90	5,605	1,507	98	7,425	1,996	82	3,357
94	5,204	1,553	101	7,462	2,227	92	3,283
101	4,760	1,451	94	8,852	2,699	111	3,353
100	5,188	1,437	94	7,653	2,120	87	3,536
78	4,016	1,088	71	6,759	1,832	76	3,773

食料消費行動における地域格差に関する考察 (坂本美須子)

1人当たり飲料	平均=100としたときの指数	酒類	1人当たり酒類	平均=100としたときの指数	外食	1人当たり外食	平均=100としたときの指数
1,297	117	3,151	938	98	13,408	3,990	99
1,221	110	4,628	1,402	147	10,755	3,259	81
1,242	112	3,293	974	102	12,609	3,730	93
1,278	115	4,193	1,302	136	11,721	3,640	90
1,189	107	5,112	1,531	160	13,691	4,099	102
1,056	95	3,783	1,063	111	12,382	3,478	86
1,087	98	2,641	744	78	11,417	3,216	80
1,177	106	2,767	807	84	14,077	4,104	102
1,479	133	2,962	871	91	16,838	4,952	123
1,184	107	2,610	759	79	12,051	3,503	87
1,260	114	3,123	916	96	16,395	4,808	119
1,311	118	3,085	955	100	15,032	4,654	116
1,276	115	3,815	1,163	122	19,522	5,952	148
1,404	127	3,586	1,058	111	15,555	4,588	114
1,455	131	3,481	1,084	113	20,901	6,511	162
1,130	102	4,267	1,226	128	15,188	4,364	108
1,210	109	3,235	904	95	15,952	4,456	111
1,002	90	3,694	1,026	107	15,050	4,181	104
1,022	92	2,598	773	81	10,890	3,241	80
1,091	98	2,983	867	91	13,411	3,899	97
1,046	94	3,299	896	94	13,424	3,648	91
1,040	94	2,598	706	74	17,054	4,634	115
1,120	101	3,502	1,061	111	13,354	4,047	100
1,010	91	2,481	725	76	14,911	4,360	108
1,141	103	3,506	1,047	110	11,675	3,485	87
1,068	96	3,588	994	104	14,960	4,144	103
972	88	3,371	952	100	16,058	4,536	113
1,013	91	3,025	900	94	12,897	3,838	95
950	86	2,888	844	88	12,294	3,595	89
953	86	2,813	781	82	15,415	4,282	106
1,081	97	3,597	1,117	117	10,815	3,359	83
916	83	3,358	976	102	8,937	2,598	65
1,058	95	3,005	916	96	13,274	4,047	100
1,032	93	2,534	728	76	12,760	3,667	91
1,061	96	3,968	1,171	122	13,896	4,099	102
1,035	93	3,749	1,080	113	12,781	3,683	91
1,010	91	3,234	927	97	15,455	4,428	110
1,061	96	2,834	877	92	14,416	4,463	111
1,121	101	2,949	899	94	11,768	3,588	89
1,134	102	3,571	1,123	118	14,332	4,507	112
1,068	96	3,908	1,241	130	12,681	4,026	100
1,092	99	2,853	795	83	15,085	4,202	104
1,036	93	2,807	793	83	12,969	3,664	91
1,028	93	2,658	796	83	12,015	3,597	89
902	81	2,641	710	74	13,698	3,682	91
980	88	3,061	914	96	12,160	3,630	90
1,022	92	3,348	1,021	107	13,005	3,965	98
980	88	3,005	832	87	13,552	3,754	93
1,022	92	2,349	637	67	11,694	3,169	79

表 6. 指数水準と度数及び割合

指標水準	穀類		魚介類		肉類		乳卵類		野菜・海草		果物	
	度数	割合 (%)	度数	割合 (%)	度数	割合 (%)	度数	割合 (%)	度数	割合 (%)	度数	割合 (%)
120以上	0	0.0	6	12.2	4	8.2	1	2.0	4	8.2	8	16.3
100~120	23	46.9	19	38.8	23	46.9	23	46.9	23	46.9	15	30.6
80~100	25	51.0	20	40.8	17	34.7	24	49.0	19	38.8	20	40.8
60~80	1	2.0	3	6.1	5	10.2	1	2.0	3	6.1	6	12.2
40~60	0	0.0	1	2.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
20~40	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
20未満	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計	49	100.0	49	100.0	49	100.0	49	100.0	49	100.0	49	100.0

資料；表 3. と同じ。

油脂・調味料		菓子類		調理食品		飲料		酒類		外食	
度数	割合 (%)	度数	割合 (%)	度数	割合 (%)	度数	割合 (%)	度数	割合 (%)	度数	割合 (%)
0	0.0	0	0.0	3	6.1	3	6.1	7	14.3	3	6.1
26	53.1	21	42.9	19	38.8	16	32.7	15	30.6	21	42.9
22	44.9	27	55.1	25	51.0	30	61.2	20	40.8	23	46.9
1	2.0	1	2.0	2	4.1	0	0.0	7	14.3	2	4.1
0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
49	100.0	49	100.0	49	100.0	49	100.0	49	100.0	49	100.0

表 7. (1)食料費の12大項目の平均支出額、標準偏差及び変化係数（世帯当たり）

	穀類	魚介類	肉類	乳卵類	野菜・海草	果物
平均値	6,944	6,363	6,396	3,479	8,074	2,348
標準偏差	550	881	924	321	928	390
変化係数	7.9	13.8	14.5	9.2	11.5	16.6
	油脂・調味料	菓子類	調理食品	飲料	酒類	外食
平均値	3,064	5,251	8,278	3,785	3,255	13,759
標準偏差	212	474	845	408	574	2,200
変化係数	6.9	9.0	10.2	10.8	17.6	16.0

表 7. (2)食料費の12項費目の平均支出額、標準偏差及び変化係数（1人当たり）

	穀類	魚介類	肉類	乳卵類	野菜・海草	果物
平均値	2,033	1,867	1,871	1,018	2,366	689
標準偏差	180	293	269	96	306	125
変化係数	8.8	15.7	14.4	9.4	12.9	18.2
	油脂・調味料	菓子類	調理食品	飲料	酒類	外食
平均値	897	1,536	2,424	1,109	956	4,027
標準偏差	69	136	269	133	187	670
変化係数	7.7	8.9	11.1	12.0	19.6	16.6

資料；いずれも表 3. と同じ。

4. 考察

食料消費はかつては所得による影響が最も大きかったと考えられる。所得の上昇につれてエンゲル係数も急降下し栄養状態も急激に改善されたのは周知の事実である。しかし食生活における意識の変化は、他の生活分野たとえば衣生活や住生活、あるいはレジャーといったものが急激に変化、変貌していくのに比べれば、非常に低いものだったと考えられる。それは食生活そのものが生命の維持に直結する最大の消費財であり、選択の余地のないものだったからである。近年、食生活の周りの環境は大きく変わった。すなわち、食品工業の発達、外食産業の進出、流通方法の改善・改良、供給者による消費者心理の操作などが見られる⁽⁷⁾。また多くの食料が氾濫する中で、一定レベルの所得水準を持っていれば、多くの食料を取得し、いろいろな方法で使用あるいは消費できるようになった。これはそのまま、どのように使用するか、どのように消費するかという実際的な問題をも提起してくることになる。

以上のような問題意識をもとに食生活の成熟化を前提として、都市間格差が依然として残っているかどうかということを見てきた。ここでは、資料の制約から、県庁所在都市に限ってみてきたので、これをそのまま都道府県間格差あるいは地域格差を見る資料としては使えない。しかし県庁所在都市がその県を代表すると考えれば、県間格差と捉えられないこともない。

まず世帯の収入及び食料消費支出についてであるが、これは明らかに東高西低という傾向を示している。全体としてみれば指標水準80～120の範囲内にほとんどすべての都市が入っている。しかしたとえば九州8県の都市の中にはこれらの三つの指標のすべてが平均を上回るという都市はひとつもない。逆に三つの指標のすべてが平均を上回る都市は東京都区部を始め大都市圏の都市、そして秋田、新潟、高知などの地方中核都市である。ちなみに個数は16であり、これは全体の約33%になる。東京を100とした指標を用いればこの差はさらに広がることになる。すなわち昭和30年代に問題とされた首都東京との格差はほとんどの地方都市においてまったく解消されていないのである。

次に食料消費支出についてまとめると次のようになる。12大項目の中で、1人当たり支出額が最も大きいのは「外食」であり、次いで「調理食品」「穀類」「野菜・海草」となっている。このように、食の外部化を示す項目と伝統的食習慣にのっとりた食料の消費が並存して大きな地位を占めているのである。逆に1人当たり支出額の小さなものには「油脂・調味料」「酒類」がある。これはこれらの食料の特性から来るものと考えられる。すなわち「油脂・調味料」は家族一人ひとりに必要なものではなく、そのほとんどが料理の中に必要とされるものであること、いうなれば規模の経済が働くということである。また「酒類」は明らかに消費者の年齢によって消費量に大きな差が生じるであろうから、平均としては小さくなるということである。

さらに都市間の相違を見るために1人当たりの支出額について、平均を100とした指数を見た。食料費そのものがきわめて必需性の高い消費財であるため各項目とも大きな格差は見られない。一つ一つをみていけば「果物」「酒類」などの比較的選択性の高い項目において分布に拡がりが見

られ、すなわち変化係数が大きい。当然ながら逆の選択性の低い項目、たとえば「米類」「油脂・調味料」などにおいては、分布に大きな拡がりは見られず、変化係数も小さい。ここでは、重要な蛋白源でありながら、変化係数の大きい「魚介類」「肉類」について、今後都市間のデータの比較や同一都市での時系列分析等が必要になってくるということを指摘しておきたい。

結論を言えば、「現在食生活は成熟化し、所得による食糧消費の変動もほとんど見られず、食生活は今後ますます外部化していく。」という大方の予想は、概ね正しいものの、県庁所在都市を見ていくとその中にまだ平均からかなりはなれた位置づけにある都市も見出され、依然として地域格差につながる要因を内包しているといわざるを得ない。以後は各都市の成熟化の様子をデータをもとに把握していくこととする。

引用・参考文献

- (1) 時子山ひろみ「フードシステムからみた食生活の変化」(『経済セミナー』所収) 日本評論社 2006年
- (2) 唯是康彦, 三浦洋子『食料経済 2001』同文書院 1997年
- (3) 坂本美須子「食料消費行動における年齢階級間格差に関する考察」(『佐賀女子短期大学研究紀要』第38集 所収) 2004年 及び同著「家族の変貌と食生活」(『家庭科教育』78巻5号 所収) 家政教育社 2004年
- (4) 中山誠記『食生活はどうか』岩波新書 1960年
- (5) 時子山ひろみ, 荏開津典生『フードシステムの経済学』医歯薬出版株式会社 2000年
- (6) 内野澄子『人口変動と食生活』第一出版株式会社 1977年
- (7) 日本フードスペシャリスト協会『食品の消費と流通』建帛社 2004年